SENRYU ZASSHI
Published monthly

川柳雜誌

九月號

麻生路郎★主宰

川柳忌と我等

川柳詩の始祖、柄井川柳は享保三年十月戊戌に（八代將軍吉宗の治世）江戸淺草の新堀端、龍寶寺門前町の町名主柄井八右衛門の一子として生れた。

幼名を勇之助、元服して正通と呼ばれ、三十八歳の時、父の後を襲うて八右衛門と改稱、龍寶寺門前町外數ケ町の町名主となつた。

○

川柳は綠亭又は無名庵と稱し、前句附の點者として令名嘖々たるものがあつた。資性穎敏能く事を運ぶの才があつたそうであるが幼時のことは少しも傳へられて居ない。しかし、柳祖の選句眼がいかに透徹してゐたかは川柳詩が遂に一點者である川柳の名によつて呼稱せられるのに觀ても証差とするに足るであらう。

翁は十一代將軍家齊の治世寛政二年に年七十三歳で江戸に歿した。

○

九月廿三日は柳祖柄井川柳の百六十七回忌に當る。新日本文化國家再建の途にある我等川柳人はこの忌日に際し、川柳詩の昂揚に一段と努力すべきことを宣誓しなければならない。

句順禮

麻生路郎

〔一〕

葭乃と二人、早晝を喰べて出た羽衣で乘換えて高師ノ濱で下車。貴志子さんを訪ねた。盧子の「花鳥諷詠」の横額の懸つてゐるいつもの奥さんの部屋で歡談。食糧難時代にそなへて、こゝの庭にも南瓜がぶら下つてゐる。夕食に、鰯燒の馳走になつた　四月廿九日のことである。三人で小集をした。

インテリは急所になつて影を消し　貴志子

インテリの無口がたたる疎開先　葭乃

ジャガ薯包む　英文毎日　路郎

〔二〕

六月二日。朝はやく家を出た。上六から生駒へ。こゝで信貴生駒電鐵へ乘換え、龍田川で下車した。改札もない平和な野中の小驛である。あたりの麥はすつかり金色を呈し、もう刈取るばかりになつてゐる。坂二つ越して平群村椣原の凡々子氏を訪れた。「むつみ」の主宰者が正光寺といふ小さな寺の住職であるとは意外だつた。しかし、海外引揚者のために一ト肌脫ぐといふ記事を「むつみ」に發表された眞摯な態度に心を動かされた私としては氏が僧侶であることに寧ろうなづけた。近ごろの僧侶の殆んどが完教家でないのに、ある種のいきどろしさを感じてゐる私は凡々子氏の溫い心の持主であることを、こよなくありがたく思つたのである。

晝前からボツリボツリとむつみ社同人の六七人が集つた。數に於ては多くはないが極くフアミリアーな集りであつた。

私には「田園風景」の選評を課された。ここの句ぶりは

復員を待つ老の手に牛をひき　文女

食べるものばかり車窓へ野は廣い　京介

疎開者の畑褒めてる篤農家　凡々

○

供出を知らず蝗が飛び違ふ　路郎

疎開の子繩の帶するまでに慣れ　同

この村も非農家の子に寫生され　同

〔三〕

九時半頃に家を出た。南海線貝塚驛で、水間線に乘換え、名越で下車、小丘の方へ向いて歩く。千石莊病院はつひ鼻の先にあるやうで、歩くと一寸ある。墓地を拔けて近道を行く。庸司君に會ひ北巳號階上の面會室で晝食。庸司君から無一君が悪くて岸和田の自宅に歸つてゐるとのこと、近く病院を辭めるのではないかと云ふ噂もありますと聞かされた。特に親しくしてゐたわけに、自宅に歸つてゐると聞いただけでも淋びしいことである。

午後一時半ごろから、娯樂室で文化部の川柳會が開催された。戶外の莢竹桃は毒々しい色を見せて暑さを倍加させてゐた。しかし今日の私には雜吟の選評だけが課されたので選句の一句々々をいつもよりもウンと力を入れて批評したこんなことは近ごろの私にはないことであつた。批評が濟んだ時には勘なからず疲れてゐた。しかしそれは私にとつて快い疲れであつた。

この日は雜吟には佳吟が多くあつた。殊に表現の多種多樣さが私に拔句の一句々々を批評させた原因であつた。この際に云つて置きたいことは、例令沒句でも多種多樣な表現技巧が用ひられてあれば一々批評するのに可能性が充分であると云ふことである。同一列の凡庸作に對して、一々批評をのぞまれることは私の最も苦痛とするところである。

この日の收穫から左の三句を採錄する。（七月廿七日）

安靜の窓が四角に今日も晴れ　朱凍子

母の手に針は魂ある如し　同

むかしむかし乞食も米の飯を食ひ　庸司

續川柳講座（2）

なぜ沒になつたか

麻生路郎

なぜあの句が沒になつたのですかとか、どんな句が沒になるのですかと云ふ質疑をよくうけますが、沒の理由は必ずしも一樣ではないのであります。例へ佳吟でありましても沒にしなければならない場合もあるのでありますから、何故沒にしたか、どんな句を沒にするかと云ふことに就て少しく述べて見やうと思ひます。

先づ第一は着想が平凡であり、單なる報道に過ぎない句「所謂さうですか川柳」は沒になります。例へば、

平凡な生活今日も鞄抱く

と云ふ句を作つた作家がありましたが、それは單なる報道の句でありまして、川柳詩としての情緒が稀薄であり、思想としての優れたものを表現して居りません。私達はこんな句を讀まされた場合に、さうですかと云ふ以外に、批評する言葉を知らないのであります。斯うした句は勢ひ沒となる譯です。

しかし、平凡と平淡とは壁一重の違ひでありますから、選句する時に、淡々たる特殊の句を見遁がさない容易が必要であります。次ぎに着想の平凡な句を沒句の中から拾つて參考の資といたしませう。

新柄をたゞほめられたけのこと
味は兎も角榮養があるのです　將棋さす　老父の相手　九十歳

盆踊　見知らぬ人と　笑ひ合ひ

着想の平凡な句が捨てられると同時に、着想の陳腐な句も沒となります。

こゝに、

辭職さへすれば役人事が濟みと云ふ句があります。穿ちの句として、拔いて拔けない句ではありませんが、既に先輩によつて云ひ陳るされてゐるので、創作藝術である川柳の畑では、その功を先輩に讓らなければならぬので沒とされる譯であります。句材の配合などに就て申しましても、梅に鶯や竹に虎などのやうに先人が見つけたものを踏襲してそれを自己藥籠中のものにすることは容易ではないので多くは沒となるのであります。

むかしむかし稼げば樂になりしかの句の如きは、「稼ぐに追ひつく貧乏なし」と云ふ古諺に想到いたしますが、その古諺を「とか」の二字によつて抹殺したアイロニーがこの句の手柄となつたのであります。しかもこの句には生活の苦惱が遺憾なく描出されて居ります。陳腐と云ふ烙印を捺されなかつた所以であります。

次に、句意の不明瞭な句も沒になります。僅に十七音字しかない短詩型でありますから、作者の獨りよがりの句になり易いので、句意が不明瞭となり、沒の憂き目を見るものが可成り多いのであります

例へば

犯人に非す支那へ高飛し

と云ふ句がありましたが、なぜ「支那へ」でなければならぬのか、なぜ「高飛したのか」句意がハツキリいたしません。これは全く作者の獨合點の句と解釋するより外に解釋の仕樣がないのであります

例示しました句は作者が最初に考へてゐた想から埒外へ出た一例でありますが、句意が不明瞭となる原因は感激が餘りに強すぎて、句意を充分盛り切れない場合にも生じるのであります。措字が適切でないために句意が判然としなくなる場合もありますが、何れにしても沒となる譯であります。

又、その内容が川柳の本質から全然離脫してゐる場合にも沒となります。

バツクには竹籔紅や黄な花

電飾に五色の雨が降りそゝぎ

の如きは十七音字を藉りて單純に美を詠出したに過ぎないのでありますから、川柳として認容することが出來ない結果、沒となるのであります。

雨晴れて梢たのしや小鳥鳴く

夏の雨涼しさ置いて遠く去り

炎天や　石材にある　美しさ

なども、想の取扱ひ方や表現型式が川柳と云ふよりも、寧ろ俳句に近いと云へるのであります。これ等の句も又沒となります。

敍法が拙劣なために、調子の整はない句も沒となります

惜しい花瓶割目は向ふむき

と云ふ句がありましたが、敍法が拙づいために全く舌足らずの句となつてゐます。作者は何かを摑んだつもりらしいが、敍法の拙劣さが、作者のねらつた點をハツキリ味はせることが出來ないのであります。

措辭が不適切な句も沒になります。措辭が代用品であつて、句が光る筈のないことは云ふまでもありますまい。一つのものを表現するのには一つの語彙しかないことを念頭に置いて、最も剴切な語彙を選まなければならないのであります。例へ同異語であつても、そのうちのどれが最も適切であるかを一考すべきであります。

七轉び七起き未だ世に出ずと云ふ句は「七轉び七起き」だから、「世に出ず」だ。詰り、「七轉び八起」だつたら世に出る筈だが、と七轉び七起きと云ふ言葉に興味を持つた作者は、それを「未だ世に出ず」と說明したのに過ぎないのであります。これなどは措辭が適切でないので、

八起き目もまだ共稼ぎ共稼ぎ

と云つた風に、古諺の語彙をそのまゝ使用した方が句が生きるのではないかと思ひます

新聞柳壇などの選をいたして居りますと、よく剽窃句を發見いたします。剽窃句が沒になることは餘りに當然で說明するまでもありますまい。

他人の句の剽窃ではないが、一字一齣も違はない句を發見することがあります。同じ應募句の中で數句暗合することさへあります。何分短詩型のことでありますから暗合はまぬがれ難いのであります。しかし暗合するほどの句に飛び抜けていゝ句は無いものでありますから、暗合句は多くの場合全部沒にいたします。

暗合句の方は一字一齣も違はない句でありますが、僅に一二字違つてゐるばかりで全く着想が似通つてゐるのがあります。これを類句と呼んで居ります。類句の場合には敍法や調子や、いろんな點を比較して、その中での優れたのを一句生かすことにいたして

居ります。尤も抜くだけの佳吟でなければ類句は十把一ト**からげ**で没になる譯であります。

廻覽板勝手口からは入つて來
廻覽板勝手元から屆けられ

の程度の類句は辭齣や着想が類似してゐると云ふ理由だけでなく、作品の價値が低いために二句とも没にしたものであります。辭齣の上で僅に一字違つてゐても、句意が全然違つてゐる場合があります。その場合二句とも優れた句であれば二句とも**抜きます**。

指導的立場に置かれて選句をする場合、その**作**家の個性をのばすため、少々**疵**があつても**抜**く句と、たとへ疵はなくとも誰でも作れる程度の句は**没**にすることがあります。それによつてその作家のパイロットの役をつとめてゐる譯であります。私の指導してゐる川柳不朽洞會の會員の作品が、それ〴〵特異性を持つてゐると云はれるのも、選句にそうした苦心が拂はれてゐるためであります。

これと、同じ理由で、作家のレベルによつて、没にする句と、會のレベルによつて没にすることがあります。十年も二十年も作句してゐる作家と、半年や一年の作家の句を同じレベルで選句したのでは**指導的な選句とはならないから**であります。この點、特種の新聞雜誌で募集した懸賞句などの選句とは類を異にするのであります。作家のレベルによつて選をする關係上抜ける句の句數の多寡は問題にいたしません。

次に、新聞雜誌に發表する場合に作品そのものの藝術的價値とは別箇に、國策に順應して削除する句があります。治安を害する句、反國策の句がそれであります。戰時中にいかに名句であらうとも反戰思想の盛られた句の發表は許されなかつたので、選者は同時に檢察當局の眼を併せて選句したので没とした句もあるのであります。

この外に、選者の感受性の不足、教養の不足、未經驗と誤判斷等に由つて没となる句がありますから、その點、特に選者を選らまねば折角いゝ素質を持つた作家でありながら、枯死させられてしまふ惧れが多分にあるのであります從來の選者が、選句上文學的な確たる基準を持たず、單なる經驗により、しかも選者の好き嫌ひによつて選句をして天分のある作家の句を芽のうちに剪み切り、柳界を毒した罪は思ふても寒心すべきで、今日なほ、デモ選者の横行を許してゐる點柳界發展の遲々たる理由の一つに數へることが出來るのであります。

斯く云つたからと云つて、**何人の指導もうけず、作家が**自選によつて一人よがりの句を發表することになれば、更に柳界を毒することとなるでありませう。句會などで互選と云ふことが行はれますが、この場合の高點句の多くは誰にでも判りやすい句、作品の價値から云へば中庸のものが多く、ウンと優れた句がかへつて没になることがあります初心者が多數交じつてゐる時には折角の名吟も無殘な没となるものです。初心者は初心者のレベルの句を抜くからであります。お互ひにもつと選と云ふことを重視しなければ作品の向上も何もあつたものではありません。

作家として折角苦心の作が没になるか、ならぬかと云ふことは重大な問題でありますが、抜いて呉れる選者が必ずしもいゝ選者である譯でないことも知つて置かねばならないのであります。

如上の解說に照合して省察されたならば自分の句が何故没になつたか、没になるほどの惡句ではなかつたが、反國策的な句であつたために没として扱はれたのであるとか、大體の見極めがついて爾後の作句上參考となるでせう。

没になつた句は潔く捨てよ

自分の作つた句と云ふものは、飛切りいゝとは思はないまでも、そんなに拙いとは思へないものであります。ましてあゝでもない、斯うでもないと苦心の結果になつた句でありますと、何故あの句が没になつたのであらうと口惜しがり、あの選者は句を觀る眼がないと、選者の罪にしてしまう作家もあると聞いて居ります。しかしながら、視野の極く狹い選者でないかぎりさうむざ〳〵と闇から闇へ葬つてしまうものでもありません没の句には没になるだけの疵がどつかに存在するものであります。作家としては痘痕も靨と見へませうが、選者には痘痕は痘痕としか見へないのであります。少々恨まれても、痘痕は痘痕ですと云ひ切れぬやうでは選者の資格がないことになります。しかしデモ選者になりますと、痘痕を靨ですと作家に諛ることもありますから、自慢れた作家は其處で行詰りとなるのであります。

商品の如く大量に製產し、多量に販賣する品でさへ、名を惜しむ店では製品を精査して出來損ひは用捨なくハネてしまひます。まして創作藝術としての川柳の場合に、作品のすべてを各方面の市場に送りつけて得意の鼻をうごかしてゐるなどと云ふことはもつての外であります。

私は常に、後進を導くのに没になつた句は、いさぎよく捨てよと申して居ります。今その一句を捨てたところで、その詩想が、その作家から霧の如く消えてなくなるものではない。必ず他の素材を藉つて更に新らしい句として生れて來るものであると申して居ります。そして私自身句を捨てるに用捨しないのであります。しかし、その詩想を再び生かすことには隨分と苦心をいたします。作つては捨て、作つては捨て、遂に七年間を要した一句さへあるのであります。

羊羹のことでもめてる老夫婦（路郎）

の句がそれであります。葭乃の蔓珠沙華の句にしても、幾ら作つても、私が捨てるので遂に三年餘を費して一句を得たのでありました。作家は潔く句を捨てることによつて一進歩を來たすものであります徒らに自己の句に愛着を持つことは、そこに墮落の一歩があることを知らねばなりません。心すべきであります。

ハイキング
赤目・香落渓　のりば　上六
岩湧山　　のりば　難波
二上岩屋　　のりば　アベノ橋
近畿日本鐵道

川柳塔

大阪市　武部香林

敗戰元旦

元旦の肝をつぶしたジヤズの音よ

豊後水道にて颱風に遇ふ

童謡がもう聞えないローリング

紀州古座濱にて

いか飯へ濱の話のつゞきたり

米映畵春の序曲を觀る

民主主義といふか女の晴れがまし

一括の配給鯨のすじに匁をふまれ

配給の米それなのに借りに來る

藥局でぼつ〳〵飲めと云はれたり

食ふだけかあはゝと父の笑ひ聲

人飢えて米は役所の倉に寢る

今時に好いお茶だんねとへたばられ

旭川　宮田不二

妹はもう寢た時分北斗星

ラヂオから都會の味を喫つてねる

ハウマツチ指四五本で答えたり

G項に該當もせずよく太り

國民のデマ戒めた方のデマ

御破算で日本の過去、僕の過去

滋賀縣　鈴木義道

復員の瞳にふるさとの山と河

諸賣つた掌で百圓の札をよみ

誰がために道義とやらが地に落ちし

大臣がた親心と云ふを御存じか

食ふだけが精一杯の世とはなり

買出しの目に茄子や南瓜の花盛り

出雲市　尼綠之助

日御崎の海窪を探ぐる

布窪の口人なつかしく陽をうけて

岩冬々陰影をもち海の青さに委せたり

大牟田市　高田抱逸

汲取夫であまんずるのも子澤山

榮轉と思へぬ街の暮し向き

心まで雇はれてゐる塵を燒き

總領事裸で郷に引揚げる

阿蘇の宿「甘いおしるこ、あり」と貼り

うわべだけ陰膳すえて子を孕み

農相に頼らぬ僕の鍬たのし

大阪市　橋本美奈子

靜江の靈に

よくなつたら洋服を縫う話をし

名古屋市　吉田水車

一瞬のけむりの彼方二千年

再建へみな千松になれと言ふ

何處でどう工面をしたか槌の音

煩惱とはこんなものかい蠅を打つ

お土産は落葉の包あるばかり

蟲の聲六年ぶりの蟲の聲

みんな無事かと名簿をくる

大阪市　木下幽王

坐つてる顔今人押のけて乘つた顔

新聞の値上へジヤーナリスト默り

口べたの謂ふのが仲々エゲツない

弔問へ足がしびれたとも云へず

色街で天皇論を寒うきゝ

復員同志下卑な言葉で嫁をきゝ

尼さんが二人やつぱりたべること

もの云へば金が要るなりだから寢る

一坪農園

微的百姓

吉田水車

何しろ土地がないので家をめぐつてかれこれ十坪ばかり、つまり至る所をやつてゐる。目下は茄子大根、豆類、甘薯等その直前はトマト、キユウリ、唐キビ、南瓜であつたがトマトは色みかけたら盗られたので成育を待たず獲り入れて人工成熟させたが、そうしたものは皮がこわくてうまくない。キユウリも勘定したら七十本とれた大したやつはなかつたがたゞ新鮮さをよろこんだ。茄子はどうも成りが悪い上に大きくなる迄待ち切れずとつてしまふからなほさら太らぬのかも知れない。こゝにあはれをとゞめたのは南瓜である。十本植えたが大小二個しかとれなかつた。それも〆て五百匁もあつたかしら。唐キビも徒に垣根の役を果たした丈。たい肥追肥灌水等聞いたり工夫したり素人なりにかなりの努力を拂つて居るが何としても勞に酬ひてくれぬのは頼りない。たゞ刮目すべきは南京豆であらふがこれも土質がねばいので勞して効なしの類ひであらふ。只斷つて置き度いのは以上の勞作は何れも愚妻の勞働奉仕？によるもので筆者は水をやるのが精一ツばいの所である。

はへるだけはふて南瓜のあはれなり

お隣のトマトはやけに熟れにけり

貧作へ去年のことを申すなり

下肥へあるじ二、三歩退きぬ

新聞の智恵でトマトのをそ作り

芋の蔓のびればのびて心配し

大それた事にお米を作ると言ふ

家庭菜園さまぐ

木下幽王

野荒が見向もしない茄子がなり

燐酸、加里各十二匁、窒素十五匁

堆肥三貫、それに株間三尺確に家庭菜園虎の巻通りにやつてゐるのに一向に實らない。果は親子喧嘩から、闇市へ三十圓もする茄子を買に行きました。

あさましさ肥のこと迄氣を使ひ菜園も本格化するにつれて肥料も所謂自家製造だけでは追つかないそこで近所の非農家？と特約を結びその代償に野菜を提供するのであるが、こゝにもインフレの波が……。

妻「あなた大變よ向ひの藤○さんが○川さんに大根十本で取引しましたよ」

夫「畜生それぢやうちはぢやがいも一貫匁出すから此の次は是非横流しせぬ様にと頼んでこい」

素人の强みトマトに茄子がなる

會社員K君は大の菜園狂で理論に

尼崎市　水谷鮎美

科白にもないうつくしき心の燈

酒（六句）

ふるさとの兄は徳利で酌いでくれ

まあいゝさ焼けた電車の傍で呑み

酒の味わが子の頭撫てやり

文樂の人形の顔と酒を飲み

欠伸してのむ酒喜劇とはなりぬ

酒癖の一つ女房をほめちぎり

兵庫縣　岩崎柳路

大陸より還りて

久し振り聞けば儚い事斗り

若い母リンゴの唄で寝させつけ

骨と皮尚生んとしMETOKOに寫

爆彈を呑んで死んだと云ふお通夜

泣顔の哀れ靴磨きまほう

行倒れにしては太つた男なり

水泳着泳げますかとからかわれ

物干で聲がするなり虹の色

別な目で見られても居るモデル臺

何事ぞ鼠が足をなめて逃げ

無雜作に判を捺すなり代書人

麥畑ふと見つけたり晝の月

月夜に釜を拔かれたように盜まれた

大阪市　市場沒食子

手品の因が美貌にあつたとの噂

男女同權養子は尻に敷かれたり

言つてしまへば氣が濟みますと太々し

親馬鹿に付込むコツを娘が覺え

食糧放出マ司令部も肩が凝り

大阪は焼けても金の沸く所

エゴはエゴでも愛しき彼女なりしかど

奈良縣　尾崎方正

壻産の走り拔き諸蒸して出し

ダツトサン焼跡の中通り拔け

調和などどこ吹く風とパーマ搖れ

ポツダム宣言軍閥の夢深かりき

當然のやう越境の南瓜失喪す

薄ぺらな閥と云ふ殻脫ぎ給へ

奈良縣　夷一笑

ひろがれるだけひろがつた踊りの輪

三十の手習ABCDE

大阪市　西田帥樂

昭和二十年八月十五日

當分はどうにでもなれ水行水

昭和二十一年八月十五日

兎も角も家を建てよう安住の

大阪府　丸尾潮花

人間の姿かどこもすり切れて

いつの日か金のこと言ふ妻となり

逆境へ素直に折れてゐる姑

五百圓これでお前と俺と子と

吾が影の長さへ腹のたつ日あり

靜かなる日なり墨でもすりましよか

岡山縣　大森風來子

食ふに困らず家計簿のおそろしき

古新聞復員の眼に腹だたし

通譯として戰前もつけ加へ

猪が一枚喫茶に落ちつけず

闇流れしそうな品へ籤となり

大阪市　新川博也

死にたくはなし闇賣になり下り

罹災するまでは持つてたように云ひ

卵二つ、長男と父の皿

釣革に兩手ですがる疲れやう

東京都　福田山雨樓

握り飯から梅干が出て涙ぐむ

羅漢あり美女あり電車蒸し暑し

メチールで倒れ人生カツトさる

野獸性子に見付けたり哀し

は仲々精通してゐます。從つて同僚間では專ら重寶がられる存在でしたが、話の都合でK君が餘り大風呂敷をひろげ過ぎたため同僚が打揃つてK君の畑を實地見聞に來ることに成りました。慌てたのはK君です。何しろ南瓜は葉ばかりトマトなど花も咲かない始末ですそこで先生闇市へ一走り野菜をうんと仕入て其處彼處にしばりつけ無事体面を保つことができました當のK君も見學に來た同僚も見事に實つてゐる南瓜の底に曇で値段が記入してあるのに氣付かなかつたのは何よりです。

私の菜園

丸尾潮花

私の家庭では夏子が舖道の一角を利用して私に良く似た可愛いゝ菜園を造つて茄子の苗を五本ばかり植へてゐる。舖道であるために肥をかける事が出來ないので、まるで植木に水でもやる樣に水ばかしをかけて育てゝゐたが、七月の中頃から可愛いゝ茄子がなりはじめてそれでも三十個ほどは食膳を賑かにして呉れました。潮花式の菜園です。

指ほどの茄子を夫婦で大事がり

闇値で一千九百圓

水谷鮎美

十二坪ほどの農園で、茄子、きゅうり、トマト、南瓜、きび、唐辛子、まくわ瓜、ふだんそう、さんど豆、ほうき草などよき收穫でや

闇市閉鎖後の遲配にも自作農でよく耐へられました。それも充分とは言へないのは當世ながら三歲の智ちやんから七十四歲の老母までの九人家族を土が養つてくれた有難さを今更ながら感謝してゐます長男と長女のふたりが畑の收穫を闇値に見積つてそろばんに入れて見ますとなんと金壹千九百九拾參圓也と成りおもはず歡聲をあげました。

妻も子も夫も老母も土のいろ

胡瓜から茄子へ

市場沒食子

先見の明が有つたと言はうか十年以前割方早く隱居をした父が其の頃人が嗤つたにもかゝはらず徒然の樂しみと少しでも家計の足しにと、裏の空地を十坪程耕したのが大いに役立つて戰時中も闇市時代も僅かな野菜を購入するのみで殆んどが自給自足でやつてゐます。所が面白い事にはこの收穫をお錢に換算したら父が働いてくれた頃より遙に多い儲けになつてゐる事です。最も其の後擴張して四十坪位はありませう。今年は胡瓜の當り年でした。どんなに代用食として役立ち、乏しい食膳をにぎやかしてくれたか。その救ひの神の胡瓜も既に時季が濟んで茄子がいまその代りを務めて呉れてゐます

農耕休暇父の指圖の鍬を持ち

★　★　★

漫筆

新日本の姿

麻生路郎

（一）右行令

左行令が右行令に變つた。百八十度の轉回である。近ごろの日本人は百八十度の轉回には驚かないところが、どんな命令が出ても、ハイハイと素直に從ふ人種と何事にも風馬牛で一向從はうともしない人種とがある。

右を歩け――大阪府警察部と云つた懸垂幕をブラ下げた位ではナカナカである。その筋の命によりも、近ごろでは藥の効能書ほどのキヽメも無くなつたので、事毎に進駐軍の命によりとアメリカを煩はすことが夥しい。

左り前になつたで右を歩かされと云ふ譯でもあるまひが、「地下鐵では左側」と云ふ例外もまだアチコチに見うける。

右右と麥から顔を出して云ひと云ふ古句があるが勿論この句の場合は右側を歩けと云ふ意味ではない。田舍の岐路に立つて、「どこそこへ行くのにはどッちへ行つたらよいですか」と訊いたら百姓が麥畑から顔を出して「右右」と大きな聲で敎へて呉れたのを詠んだのである。

道とへば一度にうごく田植笠と云ふ句もある。

ひんぬいた大根で道を敎へられと云ふのもある。何れも情景が彷彿として目に浮んで來る。右行令實踐の情景がハツキリと眼に浮ぶやうな句を誰かが作つて見ても面白からう。尤も何んでも彼でも川柳でつくらされてはやりきれないが。

（二）自由

與へられた自由で、新日本をデツチ上げやうと努力するのはいゝが、ハキ違へた自由を振り廻はす連中の多いのには困まる。幾ら自由だと云つたところで、人前で云つていゝことゝ、云つて惡いことゝある位なことは知つて置かねばなるまい。

熊澤天皇を呼稱したり、ナニヒト及びその妻などゝ書いたりしてそれでいゝと思つたり考へたりするのはどうかしてゐる。

自由や平等のキレ味は正宗でなくて村正になり易い。心しなければならぬ。

あの不自由な大釣鐘を舊日本へデヂケートした四天王寺が獨立した。

今日からは自由の鐘の鳴るところ

（三）女

近ごろの若い女の九〇パーセントまでは女の持つ美しさを捨てゝしまつた。そして男でもヒンシユクする、醜惡さを電車の中でさへ露骨にバラ撒いて恥としない。同じ年頃の男の方に、女の持つてゐた美しさが移植されてゆくのではないかとさへ思はれる。電車の中での老婆は昔も今も變らぬ厚顔無恥の醜惡さだ。

日本の女らしい女はよくよくの用事ででもなければ外出しなくなつた。

口紅であゝ女かと思はされ

（四）花のない焦都

いかに食糧に窮したからと云つて、焦都の端から端まで、藷や南瓜や玉蜀黍ではやりきれぬ。僅に中之島の燒跡で向日葵が夕日に輝いてゐたのを見た。それも一坪農園の垣として咲き誇つてゐるのに過ぎなかつた。立札を見たら阪大病院の看護婦さんの農園だつた。

玉蜀黍の垣の代りに向日葵の垣にしただけでもどんなに眼をよろこばせるか知れないと思ふと心にゆとりのない人たちの淺間しさをしみじみと思はされる。高い花を買つて床に活けるばかりが能ではあるまい。

野荒しを怖れた藷の細いこと

（五）寶籤

四天王寺の經木書きのやうに、机一つで、寶くじを賣る店が路傍のあちこちに出來た。十萬圓に釣られて手を出す仕組みだ。十圓フンバツして一枚買へば景品として金鵄三本をすぐに呉れるので、當らなければ三圓三十三錢三厘三毛の煙草三本を煙りにしたと思へば諦めがつくのである。その一人々々が、ひよツとして當つたらといふ夢を描きながら家路をさして歸つて行く。空襲を遁がれたら、慾へ慾へだ。

女房にはソツとしておく寶くじ

（六）新聞

新聞が終戰以來バタバタと生れた。一枚賣が二五錢である。一流紙も三流紙も同じ値段である。それが飛ぶやうに賣れてゐる。電車へ乘る行列かと思うと夕刊を買う行列だつたりする。二枚も三枚も買つて行く人がある。鼻紙や落紙に使ふのだそうである。女の子が急に新聞を讀むやうになつた。あんな子どもがと思ふ少年さへ買つてゆく。讀みもするらしいが第二の目的に買つて歸へるのであらう。

欄市の品夕刊で包まれる

門

高鷲亞鈍

豪壯な門構へに
部厚な標札が煤けてしまつてゐる
白日（ひる）の門燈が灯つてゐる

きのふ　この門から
三つの棺が運びだされた

さきほどから呼鈴を鳴しつづけてゐる
亂髪で眼鏡をかけた男は
たぶん　新聞記者だらうか

川柳不朽洞會だより

▼「川柳雜誌」終刊後の昭和十九年以後に下記の諸氏が川柳不朽洞會に入會された。―尾崎綠柳（岡山市）、山崎勇祐（安東市）、山口よしを（大阪市）、尼綠之助（出雲市）、河野甲東（西宮市）、高木憲勝（大阪府）、坂井楠水（布施市）米田春童（大阪市）、長田水堂（大阪市）、藏本美世子（尼崎市）、淺香憲三（高槻市）、石浦西花園（大阪府）、谷利男（高槻市）、中村凡平（東京都）、小谷鼠洞（東京都）石原使君子（布施市）、田淵あをやぎ（大分縣）、熊本春景）貝塚市）熊本春景（大阪市）、以上のうち西花園、利男兩氏は維持會員、貝塚市の春景氏永眠されたので、大阪市の春景氏入會▼「川柳雜誌」再刊後、下記の諸子が川柳不朽洞會へ入會された。▼大森風來子氏（岡山縣）が復員後新に入會▼山根梟人氏（松江市）尼綠之助氏の紹介。▼下記の諸氏は會員種別變更――小川靜觀堂（外地）、奥村丹路（尼崎市）、岩崎柳路（張家口）、武部香林（大阪市）、浪玲之介、大阪市）水谷竹莊（大阪市）、水谷琴水（新京）、井村寒浪（奈良市）以上特別會員へ、中原銃人（堺市）岩崎松代（張家口）、維持會員へ、「川柳雜誌」再刊後の會員種別變更、上田翠光（大阪市）特別會員へ、宮田不二（北海道）維持會員へ、水谷竹莊（大阪市）正會員へ。

近作柳樽

燃えるよなネクタイ若さ滿ち溢れ　京都市　春涉
千圓で闇の女を買ふ氣らし　同
男では闇の男も出來ぬなり　同
破れたる戰鬪帽よさやうなら　同
爆撃を知らない京へ復員し　同
口紅の濃い娘を二人もち　松江　四希
お歸りを言ふやうになつた子が二人　同
お嬢さん束縛といふ字が嫌ひ　同
豪快な雨見てたのし旅やよし　東京都　了洋
雨、風を呼んで烈しき御料林　同
氣の毒に妻の衣類は減るばかり　大阪市　寒草
買出の休暇資主は出さぬなり　同
結核菌僕と九年の相住ひ　同
敗戰の軍人會が消えてよし　同
このあたり閑靜にして妾住む　同
短氣ではあるが親切身に泌みる　神戸市　凡太郎
一匹を釣るにタバコが空になり　兵庫縣　美代子
自由なぞ女に遠いものと知り　大阪府　曄子
賞められるたんびに店の花がへり　兵庫縣　豊子
兄の服支那の香りがする樣な　同
うれしさは縫ひかけの服そっと着る　兵庫縣　文子
此處までは燒けずにあつた譯を聞き　香川縣　迷觀子
囚われて所詮死すべきカニなれど　同
聖人と言はれ内助の妻があり　兵庫縣　まさ子
大阪の匂ひか墨の香がうれし　兵庫縣　沙智子
杉山が思ひ出となる日もあらむ　同
姉思ふ窓はきれいな月の暈　同
御詠歌は母ばつかりの聲になり　同
お隣りも佛がかへる鐘の音　同
腹の立つ事だが男だまつてね　大阪市　史葉
米相場下つた雨は昔なり　同　斜水
ビヤホール日本人は狹く飲み　同
夏帶へ自分も締めてみたくなり　大阪市　葉茶子
南瓜も大盛つけてほゝえまし　同　良子
戸締りを濟ましたかへと蚊帳と蚊帳　同　禿天
コンナ處に住き住居ありチンチロリン　同
ねぎらへば百姓既に豫防線　明石市　喜由
男なら盜るの吊るのとおつしやるな　同
買出しへ故鄉の山は冷たかる　同
百姓の餘裕綽々花も生け　同
買出しを妻子四五丁迎へに出　同
闇屋にもなれずインテリ困つてる　大阪市　晴夫
新聞と郵便だけに降りてくる　西宮市　俊郎
疎開地に青春だけを置いてきた　同
あゝ君も七百萬の一人かい　同
呼鈴を押して恩師を訪れる　松江　快哉
いじらしさ喰物市へ子のすなほ　山口縣　柳慶
虎の子の衣類主食へなし崩し　鳥取縣　悟志
待つ人へ白木の箱は粗末過ぎ　同
桃の値に呆れ西瓜の値に呆れ　同
飢餓に紙一重の子一人ぐらしなり　愛知縣　小壘
軍神となるな平和の神となれ　大阪市　牛步
衣類家具食つてしまつた俺の胃よ　同
勳八等露天メタルの値にきかれ　岐阜市　周峰
物何か摑んでゐての立ち話　奈良市　晶平

P★P

▼句の秋が來た。川柳忌も近づいた。一と呼吸、一と呼吸が句にならなければ嘘だ。▼前號は豫想外の好評だつた。シヤイロツクホームズが蘇生させられた時、ドイルの愛讀者が擧げた歡聲、そうした歡聲があちこちから聞えて來た。私は涙ぐんだ。勝つたナインが涙ぐむやうに。

▼「句巡禮」は特種な會に招かれた時の印象や、こちらから訪ねて行つて小集や句談をした時のことを多少とも記錄して置きたいと思つてあゝした形式で始めて見た。

▼「續川柳講座」の「なぜ沒になつたか」の例句の作者は學用患者が俳劇臺にのせられた觀があつて氣の毒だが道のための犧牲なので寬恕されたい。

▼「一坪農園」の稿は幽玉、沒食子、水車、潮花、鮎美の諸君が、筆を執つた。何れもとりどりに面白い。一笑、青美の兩君の稿は締切後に屆いたので次號へ割愛した

▼淺田一博士(東都)から「拜啓川柳雜誌八月號拜受忽ち讀了、此位だと早くよめてよろしいですネ。Senryu Zasshi の h はぬいて下さい。文部省訓令式でシは si ときまつてゐます。ヘボン式はアメリカが何も强制してはゐないさうです英語よりも昔の樣に Esp. の方がうれしいです。アナタも新圓にお因りでせう。私も御同樣で、」云々とある。(路曰く。この位のページだと編輯もラクだし、隅から隅まで讀んでいたゞけることはたしかです。h は仰せによつて早速抜きました。新圓はお察しの通り、と云つては封鎖がタンマリあるやうに響きますが、ソレもアハヽヽです)

▼安川久留美氏(金澤)の通信に「いろいろ欄を見て餘りに亡き人の多いのに驚く、當市でも銀波樓と私と森の家位が生き殘り組だ」

營業科目
諸機械製作・船舶用エンヂン修理
熔接製罐・自動車修理
大阪工業所
後小路幸夫(浪玲之介)
營業所　大阪市西區江戸堀南通五丁目二五番地　電話新町　番
工場　大阪市旭區新森小路南三丁目二二番地　電話城東(33)四六四二番
旭出張所　尼崎市昭和通一丁目三一番地　電話尼崎二五七三番

とある。龜井成脩氏は去年の春、函館市外の大野村へ移られたとの事▼魚住滿潮氏（丸龜市）は戰災がなくても人生の裏街道を歩き續け僅に川柳によつて生甲斐を感じてゐられたのであるが、更に印刷業は廢業、徵用、戰災、全く火の海を潜つて漸く丸龜に落ちつかれたとの通信に接して私もホツとした。▼大森風來子氏（岡山縣）は復員後倉敷で進駐軍の通譯をされてゐる▼宮田不二氏（北海道）は大阪で戰災再度全燒で歸鄉され本年三月から旭川市立女子商業へ奉職された▼西田艸樂氏（大阪）は南河內郡に藥用植物園とその種苗園を作るため奔走されてゐる▼中島生々庵博士（堺市）は膵部の腫物のため川柳葡萄句會の不參を殘念がられ、雜題に添へて席題として「腫れ物」の出題を要請される熱心さに、席題「腫れ物」は忽ちOK▼異無一氏（岸和田市）は最近病惡化、中河內の令兄の宅で藥餌に親しんでゐられる由▼尼綠之助氏（出雲市）は川柳雜誌社出雲支部二十周年記念句會打合せのため九月二日に來社された▼岩崎柳路氏（兵庫縣）が六月末に神津村に引揚げられたと聞いたので七月四日に訪問一泊、久方振りに夜と共に談つた、一千萬の產を捨てゝ僅に小さなトランク三個で引揚げて來たのであつた。▼橋本綠雨氏夫妻（大阪）は五月廿五日に愛孃靜江さんを亡くされた昨年十二月に愛婿を迎えられたばかりなので愁めるのに言葉もない▼水谷竹荘氏は九月十日の大阪避信病院の職員慰勞大會に一と肌脫ぎ、川柳劇の脚色に演伎に小唄に同氏得意の饒ツぼさを發散させるらしい。むづかしい顏をしてゐるばかりが能ではない、破目を外づす時には大いに外づす方がいゝ▼蛭子省二氏（愛媛縣）は朝鮮から山口縣へ引揚げてゐられたが更に愛媛縣內子町の佐野醫院方へ移られた。安住の家がなかなか得られないらしい。▼立川跳二氏（上野市）は今夏愛孃伊津子ちやん（四ツ）を瘧病のために亡くされた、謹んで悼む▼姫田夕鐘氏（德島縣）は炭礦の抗木專門に健闘されてゐる由▼森菊子未亡人（豊中市）は東魚氏が昨秋北京で客死されて以來、遺兒たちを抱えて惡世相と闘つてゐられる、長男の琪一君もパトハハ島の作業隊として殘業に從事されてゐるらしい▼高島米峰先生（東京都）は昨年の戰災で全燒、三鷹町へ避難、半農生活をされてゐる由▼野邊くもを氏（茨木縣）は戰災で大阪の自宅全燒、次女が戰災死されたので松坂屋百貨店を辭めて歸鄉、土に親しまれてゐる▼河野夜玉氏（福知山市）は大阪の鐘紡も自宅も戰災で全燒のため福知山へ避難、同市の物價高に惱まされてゐられたが九月二日に鐘紡西大寺工場へ赴任されるとのこと▼梅田幸延氏（愛知縣）から「充實した內容新鮮な編輯、「川柳雜誌」調が良く出てゐまして昔なつかしい思ひを致しました」との通信に接して尻こそばゆい感じがした。まだまだこれからです」と編輯局は張り切つてゐる▼島弘法氏（福井市）は復員されたが元氣一パイたとのこと▼藤井阿澗氏（大阪府）も焦都を去つて箕面で鍬を持ち朝露を踏む生活を讃美されてゐる▼福田山雨樓氏（橫濱）は八月廿日に岡山縣の鄉里へ歸省、廿四日に歸濱された▼長野文庫氏（今治市）は昨年八月六日に戰災で全燒、一週年目に舊位置で營業を再開始された▼吉川亞人氏（山口縣）は川柳「浪の音」を創刊、若い柳人の指導の傍ら、大島民報に時事吟を發表されてゐる▼橋本路風氏（兵庫縣）は粉濱での戰災は逃れたので、田舍へ行つて百姓を志されたが、俄百姓の惱みをつくづく味つてゐられる由▼橋本言也氏（門司市）は朝鮮京城から引揚げられた▼近江砂人氏（大阪）は疎開地京都から大阪の舊宅生玉寺町へ引揚げられた▼大阪文化協會では會員章位を個人制とされたので、水府氏と相談の結果、川柳部の會員を下記十二名に決定、八月十日の役員會に報告した。（敬稱略）岸本水府、食滿南北、生島鳥語、近江砂人、片山雲雀（以上川柳往來社ノ奥村丹路、武部香林西田艸樂、石井白面人、上田翠光麻生路郎（以上川柳雜誌社）▼川柳雜誌社主催の川柳忌は九月廿三日午後一時から、住吉大社で開催する▼川柳不朽洞會では八月廿五日、奈良縣平群村椹原の正光寺で柳路（川雜蒙疆支部幹事）魔花麗（川雜布哇支部幹事）北海（同支部同人）三氏（何れも川柳不朽洞會員）の歡迎を兼ね川柳葡萄句會を開催することゝなつた▼丸尾潮花氏（大阪府）は八月十一日に、水客紫香、万的、香林の諸君と賓塚へ吟行された▼水谷鮎美（尼崎市）は八月廿五日阪神勞組川柳會に出席された▼「川柳雜誌」の出雲支部大地吟社では八月二十六日に出雲市公會堂で句會開催した。

清談・商談
お待合せに
喫茶 みどり
上六交叉点西北角

麻生路郎著
新川柳評釋
定價一〇圓　送二圓
本筋の川柳で一粒選りの名句を蒐め、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。
戸倉普天著・麻生路郎序
普天隨筆
川柳人の隨筆の面白さは又別である。この場合の面白さは滑稽といふ意味ではない。辛辣に近い觀察の鋭さの謂である。著者は日東紡產業の專務（實費三〇圓送料二圓半で頒つ）
川柳雜誌
「川柳雜誌」の舊號
定價一部三圓送費三十錢
御注文はすべて小爲替のこと
大阪市住吉區万代西五ノ二五
發賣所 川柳雜誌社出版部

B列5號　毎月一回一日發行
川柳雜誌　第一卷　第二號
御注文はすべて前金　小爲替
一冊　金三圓（送料三十錢）
一ヶ年・十二冊　金三十六圓（送料三圓六十錢）
昭和廿一年八月廿五日印刷
昭和廿一年九月一日發行
大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
印刷兼發行人　麻生幸二郎
大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
發行所　川柳雜誌社